

## 中国詩と車

### 一、まえがき

紀元前三千年頃、西アジア、メソポタミアのシュメール人が中実車輪を用いたのが車の起源であるといわれる。一方中国においても車は有史以前から使用されており、その創始者は黄帝軒轅といわれまた史記に堯・舜・禹が車を用いたと記されているが、これらは伝説の域を出ず、夏の奚仲が車を發明し、殷の第三代王の相土が馬車を、そして同じく第七代王の王亥が牛車をそれぞれ考案した（天工開物）というのがまだ信憑性のある説である。しかし近年殷墟より二輪二頭立ての兵車が發掘され、その技術的成熟度からみてそれより大分前から車があったものと考えてもよさそうである。また殷墟より甲骨文字が見つけたが、中国では文字と車はほぼ同じ頃に生まれたのではないかと考えられる。なお伝説でも黄帝が文字と車を創案したといわれているが、いずれにしる文化を代表する文字と、文明を代表する車はある意味で同じ源泉から發生するのも知れない。かのインカ帝国が相当高い文化、文明をもちながら文字と車を

### 中島達夫

共に持ちあわせなかったこともこの両者の関連性に何かがあることを示唆しているのではなからうか。なお殷の甲骨文字で車をさす字 **𨋖** を見ると、車の構造が巧みに象形化されており、また漢字の車という字の原型であることを充分うかがうことができる。

西アジアの車の最初の発想は「ころ」からうまれたといわれるが、これに対し中国では「飛蓬が風に転ずるのを見て車をつくることを知った」（「淮南子」説山訓）といわれ、一応東西で独立に車が創製されたようであるが、殷墟の車と西アジアの車とは構造的に似通った点も多く、果して東西で技術の移動があったのか、それとも別の出发点から同じようなものに帰結したのか、まだ不明とされている。

中国の車は誕生以来、戦車として、荷車としてまた農車、乗車として次第に發達、普及していった。しかるに中国から車を導入したわが国では、当初牛車として宮廷を中心として一部に使用され、また江戸時代に大八車として貨物運搬に使用された程度で、全国的に広く利用されるころまではいかなかつた。むしろ乗用としては車は次第に退化し、「かご」としてかわられることになる。このことは中国では乾燥した広大な土地が車の發達、利用を促し、これに對

しわが国では土地が狹隘で、しかも山岳、河川が多く、気候も湿潤で水田も多い。これが車の利用をさまざまに、力学的には効率の非常に悪いかごに負ける結果になったのだろうといわれる。中国でも華南地区は湿潤で、南船北馬といわれたように車はあまり用いられず、また華北の北方地区では車より騎馬が重用されていた。なお古代の車は旋回、制動の機能が劣悪で、そのためカーブの多い道や坂道では使いにくいものであったように、「車は途中、山にあっても止まり、河にあっても止まり、曲り道、小道にも止まる」(天工開物)といわれ、そのたびに馬をつけかえたりしなくてはならなかったようだ。旋回車軸の考案は比較的遅く、紀元前一世紀頃ケルト人によるといわれるが、これが実際に広く用いられたのはさらにおそく中世になってからのようだ。さらに車は道路がなくては使えないものにならないが、西洋ではローマ帝国が道路の整備を強力に行なったことが車の利用を盛んにしたのであり、スイスのある歴史家が「ケルト人が乗物をつくり、ローマ人がそれを走らせるのにふさわしい道路を提供した」といつている。中国でも秦の始皇帝が天下を統一するや車輪間の幅を全国的に統一し、また大道を全国いたるところに造成させたといわれる。これに対しわが国ではこのような積極的な交通政策がとられなかったのが車行文化の発達しなかった一因であろう。このように過去ほとんど車に乗る習慣をもたなかったわが国が近年自動車王国といわれるようになるのであるが、この変身もまた興味ある現象であろう。

ところで中国では車ははじめおそく戦闘用として発達したものの

であろう。殷が夏を亡ぼしたとき、殷の用いた戦車は二頭立てのもの約七〇両といわれ、数百年後この殷を討ったときの周の戦車は四頭立てのものが主体で約三百両であった。さらに数百年後の戦国時代に入ると、楚、秦などはそれぞれ戦車千両をもつようになる。当時諸侯を千乗、天子を萬乗と形容したが、それぞれが動員しうる戦車数を示すもので、戦車の数が権勢の大きさをあらわしていた。しかし戦国時代の後期に入るとこの戦車も次第に用いられなくなり、戦闘の中心は騎馬戦に移ってゆく。そのかわり車は乗用、運搬用に広く使われるようになる。乗車では「庶人は一駕(一馬)、士は二駕、大夫は三駕、卿は四駕、諸侯もこれに準じ、天子は六駕」(孔疏)とされ、何頭立ての馬車に乗っているかでその身分が分かるわけで、まさにステータス・シンボルの性格が強く、車馬不來といえば貴人の訪れない落魄の身を意味するようになる。しかしやがて、東西に流れる黄河、陽子江に加え運河が四通八達してくるにつれ、交通、運輸の主流は次第に車から舟へ移ってゆくのである。

このように中国における車文化の実態、変遷は興味深いものを含んでいるが、その様子をうかがい知る一つの方法として、中国文学の主流である詩をとりあげ、古くは詩経から新しくは清代詩まで約三千年にわたる各時代の中国詩より、車に関連する語句を調べてみた。ここにはメモとして、抜萃した語句を若干の分類のもとにほぼ原典の時代順に列挙した。調べた詩の数は中国詩全体から見ればまさに九牛の一毛にすぎないが、中国の長い歴史における車文化の一端をかいまみることはできるであろう。

二、語

一、各種の車

戎車 大車 役車 輜車 小戎 路車 檀車 元戎 田車 鞞車 後車 臨衝 棧車 衆車 罽羅 車 輶車 乘

兵車  
荷車または乗車  
農車  
軽い車  
兵車、大戎（または元戎）に対す  
諸侯の車  
堅木の兵車  
大きい兵車、鈎車（夏）、寅車（殷）と同じ  
狩りの車  
人のひく手車  
荷物などを積む副車  
城をつき破る兵車  
粗末な車  
隨行車  
輶車のこと、車の二本のながえの間に網をはって鳥をとる  
臥車  
（以上、楚辭）  
乗りもの

堅車 瓜車 輕車 輦車 征駕 征軸 高車 柴車 犢車 香車 畫輪車 駟車 步輦 征軒 魏車 輶車 軒車 炭車 朱輪 素車 庫車 屋車 官車

堅木で作った立派な車  
瓜を積んだ車  
輕快な車  
手車  
旅ゆく車  
旅ゆく車  
きぬがさの高い立派な車  
破れてみすばらしい車  
子牛のひく車、下級の士が乗る  
香木で作った車  
（以上、古詩源）  
（以上、王維）  
車輪に文様をえがいた乗車  
衣車すなわちほろ車  
人のひく車、宮中で天子が用う  
遠行の車  
（以上、李白）  
こうじを積んだ車  
（杜甫）  
兵車  
（韓愈）  
大夫以上の人の乗車  
炭を運ぶ車  
朱ぬりの車  
白木の葬儀車  
腰の低い車  
お供の車  
官庁の車

兼車 戎軒 七香車 還車 油壁車 伝 雞棲車 輓 鉤車 華軒 公車 羊車 鈿車 征輪 後乘 伝車 旃車 副車 廣柳 蒲車

つなぎ合わせた車 (以上、白居易)

兵車

七種の香木で作った車

毛せんをおおいにした車、匈奴の酋長の乗車

(以上、唐詩選)

故郷へ帰る車

油衣を張って雨よけにした車

公用車

みすばらしい車

(以上、李賀)

ひき車

城攻めの車、夏后氏時代のもの

貴人の乗る豪華な車

羊にひかせる小型のきれいな車

青貝細工を施した車

旅の車

行列のあとにつづく車

駅の間を順に送る車

もうせんでおおったほろ馬車

つきそいの車

棺をのせる喪車

がまの草で車輪をつゝみ振動を防ぐ、昔貴人を招くのに

用いたという

(王漁洋)

鹿車 挽輅

小さい車、道軌ともいう

手押し車、二人がひいて一人が押す

(以上、清詩)

### 二、天子の車

皇輿 金駕 玉乘 玉輦 鸞輿 乘輿 帝車 輿駕 玉輪 玉車 玉路

(楚辞)

(以上、王維)

(以上、李白)

(韓愈)

(唐詩選)

(李賀)

(以上、清詩)

### 三、仮空の車

日車 雲駕 虚輪 帝車 霞車

太陽のこと、六竜がひく

仙人の乗る雲の車

空輪、形なくめぐり動く心という

北斗星、天の中心に位することより

太陽のこと

(以上、古詩源)

(李白)

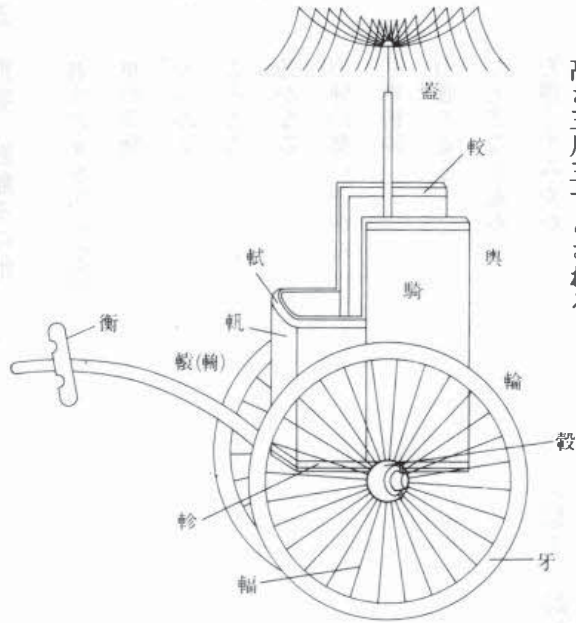


図1 車の部分名称<sup>(1)</sup>

狂車 雷のこと (以上、韓愈)  
 紫雲車 仙人の乗る車  
 陰車 鬼の乗る車 (以上、杜牧)  
 五雲車 仙人の乗る五色の瑞雲 (薛濤)  
 雷車 雷神の乗る車 (蘇軾)

四、車の部分

軌 車のこしきの頭、また車、車輪のあと、車輪間の幅をも  
 いう  
 較<sup>かつ</sup> 車軸のくさび  
 軾<sup>しか</sup> 軾のうしろの両側にある横木、較は高さ五尺五寸、軾は  
 高さ三尺三寸とされる

輿<sup>う</sup> 婦人用車のとばり  
 輿<sup>う</sup> 車の後方をおおうたかむしろ  
 輿<sup>う</sup> 車輪の矢、古くは一輪三十本  
 輿<sup>う</sup> 軾(横木)のこと  
 輿<sup>う</sup> ながえ、大車には轅、兵車、田車には軾という  
 輿<sup>う</sup> 車上の虎の皮のしとね  
 輿<sup>う</sup> 車のはこ  
 輿<sup>う</sup> 車の両側にある添え木、車上の荷を支える  
 輿<sup>う</sup> くびき、馬の首にとりつける  
 輿<sup>う</sup> 車輪の止め木  
 輿<sup>う</sup> こしきを車輪にとめるくさび  
 輿<sup>う</sup> 車輪の軸のはまるところ、こしき (以上、楚辞)  
 輿<sup>う</sup> 車上にさす長い柄の日傘、きぬがさ  
 輿<sup>う</sup> 白いきぬがさ、葬儀の柩車に用う  
 輿<sup>う</sup> くびき  
 輿<sup>う</sup> 車の後の横木  
 輿<sup>う</sup> ながえ (以上、古詩源)  
 輿<sup>う</sup> ほろ (王維)  
 輿<sup>う</sup> 車の前にある横木  
 輿<sup>う</sup> 軸のぬけるのをとめるくさび (以上、唐詩選)  
 輿<sup>う</sup> 車のしとね (高啓)  
 輿<sup>う</sup> 車前の横木 (清詩)

五、形容、熟語その他

五	冠	輪	傾	緩	飛	解	轉 <small>た</small>	下	車	班	發	車	車	車	檀	出	輜	大	大	載	宿
車	蓋	鞅 <small>ちやう</small>	蓋	轍	軒	輪	軻 <small>か</small>	車	班	班	軻	祛	祛	任	車	車	車	車	車	人	人
博學、術學、五車の書ともいう	冠と車蓋、高官をさす	車馬のおとずれ	道で会々と車蓋を傾けて語る、友をいう	ゆっくり走る車	とぶように疾走する車	輪を外す、客をひきとどめる意	車の行きなやむこと、不遇	はじめて任地に着くこと	列をなす	止め木を外す、出發	力強くすみやか	たえまなく走る	力強く走る	兵車粉碎	出陣の勢いさかん	鈴がなる	ごろごろ	からから	君主の車を司る小臣	車の荷物	

(以上、詩經)

(楚辭)

九	轉	飛	軒	萬	稅	繡	四	懸	輔	還	強	車	車	車	車	車	車	車	車	車	車	
軌	輸	車	冕 <small>みん</small>	乘	駕	轂	載	車	車	轅	車	混	混	混	混	混	混	混	混	混	混	
九台の車が並んで走れるほど広い道	物資の輸送	天かける車	車(軒)と冠(冕)、高官をいう	兵車一万台をもつ、天子をさす	車のひもを解く、退官すること	化粧したこしき、美しい車	車(陸行)、舟(水行)、櫓(泥行)、樨(きよく、釘をうらにつけた足駄)(山行)をいう、禹が治水のとき用いたといわれる	退官すること	頰の骨(輔)と齒(車)、互いに助け合うこと	車のはこ(輔)と車台(車)ともいわれる	車でもどつてくること	大きな車	秦の始皇帝が天下を統一するや、書体と車幅を全国同一にしたことより、天下を統一することをいう	書軌同一ともいう	天かける車	物資の輸送	九台の車が並んで走れるほど広い道					
(陸游)	(黃庭堅)	(蘇軾)	(杜牧)	(杜甫)	(李白)	(李白)	(杜甫)	(白居易)	(李賀)												(古詩源)	

三、句

一、兵車

彼の路は斯れ何ぞ君子の車 戎車既に駕し四牡業業たり

あの大きな車は將軍の車、我らの兵車すでに四頭の牡馬をつけ、馬

の勢いさかん

六月棲棲たり 戎車既に飭う

盛夏六月、出陣の準備完了

元戎十乘 以て我が行を啓く

大きい兵車十台、先行して道を開く

戎車既に安く 輕の如く軒の如し

兵車は前を下げ後をあげ、安定して進む

方叔泣めり、其の車三千、師于に之れ試う

將軍方叔は宣王の命をうけて軍に臨み、兵車三千台で敵を防ぐ訓

練をする

戎車嘒嘒たり 嘒嘒焯焯として 霆の如く雷の如し

兵車数多く、音さかんで雷のよう

牧野洋洋たり 檀車煌煌たり 駟駟彭彭たり

牧野の地は広く、兵車輝き、馬の勢いさかん(周の武王、殷の紂王

を牧野に討つ)

臨衝蒹蒹たり 崇墉屹屹たり

戰車堂々、崇国の堅城を攻める(周の文王)

(以上、詩經)

君公の兵車千台

路脩遠にして以て艱多く 衆車を騰せて徑に待たしむ

路は長く遠くかわしい、お供の車をわきみちに待機させる

屯れる余が車、其れ千乘なり 玉軾を齊えて並び馳す

集る配下の車千台、玉輪をそろえて並び走る

車、轂を錯えて短兵接す

(以上、楚辭)

兵車混戰、刀劍で接戦

千乘萬騎、北邙に上る

(古詩源)

兵車千台、騎馬一万頭、北邙山に進軍

車鞞 馬蕭蕭

車のひびき、馬のいななき、出征のさま

窄狭にして單車を容るのみ

(以上、杜甫)

道せまく、車一台漸く通れる要害の地

八十一車千萬騎

(白居易)

お供は八十一車、騎馬千騎万騎、漢代、天子外出のとき雇車八十一

台の定め

轂を扶け来る 関右の児

(李賀)

車につきそう荒武者、函谷関の西の若者は勇を以て聞ゆ

二、乗車その他

之の子手に帰ぐ 百両之を將る

娘のよめ入り、車百台の荷をもたせて送る  
 載ち脂し載ち牽し 車を還して言に邁く

あぶらをさし、くさびをうち、車をかえして速く走る  
 駕して言に出で遊び 以て我が憂いを寫かん

ドライブで憂いをはらそう  
 寛たり綽たり重較に倚る

ゆったりと車の横木によりかかる  
 爾の車を以て来たれ 我が賄を以て遷らん

車で迎えにきておくれ、持ち物をまとめてあなたの所へお嫁に行  
 きましよう

女有り車を同じうす 顔は舜華の如し

娘さんと合い乗り、むくげの花のような美しい顔

坎坎として檀を伐る 坎坎として輻を伐る 坎坎として輪を伐る

かんかんと斧で檀の木をきり、矢をきり、輪をきる

蟋蟀堂に在り 役車其れ休す

我今樂まずんば 日月其れ惱ぎん

こおろぎが鳴き農車もひまになる、今樂しまなくては徒らに月日  
 がすぎてゆく

間関として車の牽す 恋たる季女を思うて逝く

かんかんとかさびをさし、車に乗って美女を求めて行く

我が任、我が輩、我が車、我が牛

我が行既に集る、蓋ぞ云に帰らざらんや (以上、詩経)

荷を負う者、手車をひく者、荷車をひく者、牛をひく者、これらの

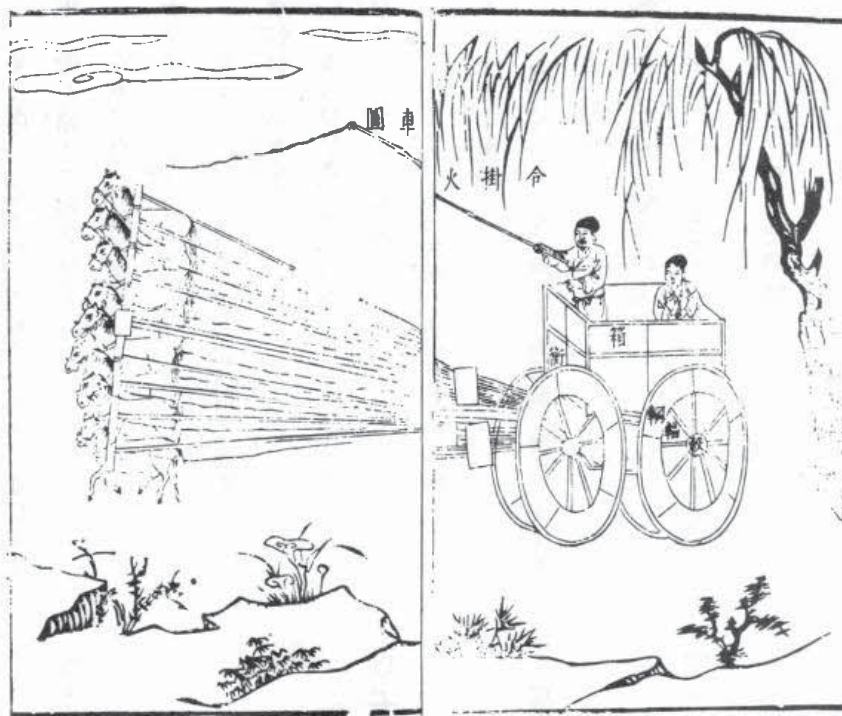


図2 八頭立ての大車<sup>(10)</sup>

人の助けて私の仕事の工事も出来上った、さあ帰ろうよ

自ら致す者は急にし 人を載する者は緩くす

欲を取って度無ければ 自ら致して反らん

自分で車を走らせるときは速く、人を乗せるときはゆっくりやれ、

欲ばると車をひっくりかえすぞ

相逢う狭路の間 道隘くして車を容れず



狭い路で、車がすれちがうこともできぬ

車を廻らして駕して言に邁き 悠悠として長道を渉る

車の向きをかえてはてしない道をゆく

車遙遙たり 馬洋洋たり

車はるばる、馬はてしなく走る

狭路に華蓋を傾け 駭駟は雙軸を摧く

狭い路で、きぬがさを傾けて相手を避けることもできず、四頭の馬

がおどろき、車の両方のながえが折れた

車馬相識らず 音は黄埃の中に落つ

ゆきかう車は互いの顔も見分けられず、黄色のほこりに車の音が

消える

車を駆つて郊郭を出で 行路正に威遅たり

車で城外に出ると行く路ははるかにうねる

遙遙として征駕遠ざかり 杳杳として白日晩る

旅ゆく車ははるか遠くへ消え、ほの暗く夕日がくれてゆく

雞は鳴く洛城の裏 禁門平旦に開く

冠蓋縦横に至り 車馬四方より来る

晩に洛陽城内に雞が鳴き宮城の門が開かれると、車の官人がぞく

ぞくと集り車馬が四方より来る

日暮れ朝を罷めて帰るに、輿馬衢路を塞ぐ

夕方退朝のみちが車馬でふさがる

鮮車、華轂を驚せ 汗馬、銀鞍を躍らす

鮮かな車がはでなこしきで馳せ、汗馬は銀鞍をおどらせる

(以上、古詩源)

命を銜みて天關を辞し 單車もて辺を問わんと欲す (王維)

君命をうけ宮殿を辞し、ただ一車で辺境に使いする

征軒に巾して阻折を歴

旅の車のとばりを垂れ、つづら折りの山路をゆく

時は炎に道は遠く行車無し

炎暑、道遠く、通る車もない

車傍に側け挂く一壺の酒

車の横に一壺の酒を傾けてつるす

菊は垂る今秋の花 石は戴く古車轍

菊は今秋の花をつけ、路の石には古いわだちのあとが見える

乱石、轍を改むべき無く 我が車、已に載ち脂す (以上、杜甫)

石道を避けようもなく、車にあぶらをさして無理に進む

商山、季冬の月 冰凍てて行轡を絶つ

商山に冬の月がでて、道凍って車も進まぬ

昨夜城外、一尺の雪 晩に炭車に駕して冰轍を輾らしむ

昨夜来城外は一尺の雪、晩に炭車が凍った道をきしんでゆく

車を廻らして牛を叱して牽きて北に向う 一車の炭の重さ千余斤

車を北に向け、ひく牛をおいたてる、車一台の炭の重さ千余斤

白輿、素車、路を争うて行く

葬儀の白いこしと白木の馬車がひっきりなし

牛の領は車を牽きて血を流さんと欲す (以上、白居易)

車をひく牛のくびは血が流れそう

長安の大道、狭斜に連なる 青牛、白馬、七香車

長安では大道が小路につながり、黒い牛、白い馬が七香車をひく  
鴉黄、粉白、車中より出づ

ひたいに黄粉、顔に白粉の美女が車を下りる  
青年、紺轆、紅塵度る

黒い牛がひく紺色のほろの車が塵を巻き上げてゆく  
秋風、南陌、車馬無し  
(以上、唐詩選)

南の街道に秋風が吹き、通る車馬もない  
還車病身を載す

病いを得て故郷へかえる  
玉輪、露に軋り圓光を湿ほす

玉をちりばめた車輪が露にきしり、まるい光がぬれる  
柴門、車轍凍り 日下りて楡影瘦せたり

柴の門に車のわだちが凍り、日落ちて楡の木影が細長い  
煙湿うて車の重きを愁う

けふる雨にぬれて車が重くなるのが気がかり  
長安に來れば車駢駢

長安には車がならんでひきもきらず  
玉輓鳴って轆轤たり  
(以上、李賀)

玉をちりばめた車が鳴りひびく  
墜車、左股を傷る

車からおちて左股負傷  
車を停めて坐るに愛す楓林の晩  
(以上、杜牧)

車をとめて楓林の晩景をめぐる

鉦車、織手、簾を巻いて望む  
(牛嶠)

美しい車のやさしい女の手がみすを巻いて眺める  
天晴れ稲を穫り車に随って帰る

晴天、稲を刈りいれ、車を押して帰る  
城頭の初日、始めて鴉翻り 陌上の晴泥已に車を没す

城頭の朝日に鴉がとび、道路はすでにぬかるんで車輪がうずまる  
舟車に算す

舟や車に課税する、漢の武帝はじめて行なう  
麥短こうしてまだ遊車の輪を怕れず  
(以上、蘇軾)

麦まだ短く遊車にふまれてもさわりなし  
車に上つて寒温を問う

車に乗り時候の挨拶に行く  
車馬、氣、霧を成し 九衢、行りて滔滔たり

車塵は霧のごとく、町中はげしく動く  
人語、車声、法曲喧しく 花光、樓影、晴天に倒なり  
(以上、黃庭堅)

人語、車声、音曲にぎわしく、花の光、樓の影が池に倒映する  
楊柳道を夾んで車声高し

楊柳の並木道を行く車のひびきが高い  
車に上りて天とする所を移す  
(以上、陸游)

嫁入りの車で新しく天とする夫の所へ移る  
大車磊磊長瓶堆し

大車に長い酒瓶を山と積んでごろごろとひいてゆく

行春の車馬、鬧さわがしきこと煙のごとし  
(以上、宋詩)

行春の車馬、さわがしくほこりをあげる

過ぎゆく旂車は水の流るるが似ごとし  
(元好問)

ほろ馬車は水の流れるようにひきもきらず

素驂そせん、廣柳に駕し 蕭蕭として城闈じやうを出づ

三頭の白馬が喪車をひき、しずしずと城外に出る

千車、葬を送る城東の陌

千台の車が葬を城東の路に送る

車を駆って郊岐に出づ

車を走らせて城外の分かれ路に出る

天寒く行軻ちやうを絶つ

天寒く行く車もない

勞うつかれし哉車おのこを輓ひく夫

つかれたでしょう、車をひく男の人

竹林、斜照上り 陋巷車轍無し

竹林に夕日が照り、さびしい村には訪れる人もない

丹雞、白犬、行軻ちやうに随う  
(以上、王漁洋)

赤い雞、白い犬が車のあとを追う

馬を並べて楡関ゆかんを行き、車を同じうして梅嶺ばいれいを渡る

馬を並べて山海関に旅し、妻と同車して大庚嶺を越える

聚あつまり觀る車へんてん争あつて駢闐へんてん  
(以上、清詩)

見を集つてきた車がこみあう

三、社会的象徴としての車

君は車に乗り我は笠を戴くとも

他日相逢わば車を下りて揖ゆづせよ

他日、君は出世し私は賤しくても、逢つたら挨拶ぐらいしてくれ

駟馬高蓋、其の慮うれ甚大なり

(四頭立ての立派な車に乗る) 富貴の人には憂い多し

願ねがいて言ことに人を懷おもえども 舟車の従したがうもの靡なし

人を恋しがつても、遊びに来る者もない

駟馬うま患うれを貰つかうこと無く 貧賤たのしみも娯たのしみを交かうること有り

富貴の人でも憂いを金でつぐなうことはかなわず、貧賤の人でも友

と楽しみを分つことはできる

窮巷りんおうには輪鞅りんおう寡すくなし

貧しいちまたには貴人の訪れはない

廬いはりを結んで人境に在り 而も車馬の喧かまひしき無し

人里にいはりをかまえているが、貴人の訪れもなく心静か

窮巷深轍きゆうきやうしんくわより隔かたり 頗おほる故人の車を廻めぐらす (以上、古詩源)

大通りより離れて閑居し、友人の車もひきかえしてゆく

閑門かんもんに秋草色あきくさつき 終日車馬無し  
(王維)

閑門に秋草色つき、終日訪れる者もない

車馬何ぞ蕭索せうさくたる 門前百草長し  
(杜甫)

訪れる人もなく、門前にはさまざまの草が長い

軒車、歌吹、都邑かみやに誼かし 中に一人、隅すみに向いて立つ有り

車や音楽の音が長安のまちにやかましいが、私一人横を向いてい  
る

喧喧として車馬来り 賀客我が門に満つ

にぎやかに祝祭の客がつかける

車を懸けんとして朱輪を惜む

退官しようとするが官給の車を手放すのが惜しい

南巷に貴人あり 高蓋駟馬の車

(以上、白居易)

南のまちの貴人、きぬがさの高い四頭立ての馬車に乗る

宅中の歌笑、日に紛紛 門外の車馬、雲の如く屯す (唐詩選)

家の中は宴会の歌や笑いがにぎやか、門前には客がむらがる

金家の香術、千輪鳴る

貴族の金さんの屋敷のある香りよきちまたに千台も車がひしめく

行輪、門を出でて去り 玉鸞、声、断続

あなたの乗る車が門を出てくつわの鈴の音が遠ざかる

門外に車馬満つるも 亦た須く緑苔を生ずべし (以上、李賀)

今、来客でにぎわっているが、何れおちぶれることであろう

千門、車轍を織る

(杜牧)

数多い貴人の門前は訪れる客の車のあとが織るよう

長者の車音、門外に有り 道家の書卷、枕前に多し (魚玄機)

偉い人は訪れて来ず、道家の本を読みふける

車馬の客無きには非ざるも 心遠くして境亦た静かなり(黄庭堅)

訪れる客が無いわけでもないが身辺静か

身は仕えざるに由つて尊し 敢えて車馬の絶ゆるを嗟かんや

仕官せぬ身は自尊、客の無いのも苦にならず

閑門、車馬無し 明月即ち佳客

(元好問)

閑門人の訪れなく、月こそよき客

車馬来らず雞犬静かなり

(高啓)

山荘には来客もなく、雞犬もまた静か

貴人冷落す宮車の夢

(清詩)

妃は冷遇され、御所車を夢に見る

#### 四、譬喩的な車

大車を將むる無かれ 祇に自ら塵さん

(詩経)

荷車の後押しをするな、ほこりをかぶるぞ

我がために飛竜を駕し 瑤象を雑えて車と為す

車に竜をつけ、美しい石と象牙で車を飾る

水車に乗り荷蓋をし 両竜に駕して螭を驂にす

水を車とし連の葉を車蓋とし、二頭の竜にひかせみづちを添え馬にする

にする

前轍の遂げざるを知るも 未だ此の度を改めず

身既に覆りて馬顛るるも 蹇、独り此の異路を懐(以上、楚辞)

前車が通れなかったが自分の態度を変えず、車がかえり馬がたふ

れても独りわが道を往く

馬を相するには輿を以てし 士を相するには居を以てす

馬のよしあしは車をひかせて見分け、士は平居で見分ける

奔車の上には仲尼無く 覆舟の下には伯夷無し

危い舟車に君子は乗らず

蹶馬は車を破り 悪婦は家を破る

つまづくような馬は車をこわし、悪い女房は家庭をこわす

衡、車を下りて治、威厳あり

張衡は着任するやきびしい政治を行なった

父母在し時は堅車に乗り、駟馬に駕しぬ

父母在世中は立派な四頭立ての車に乗り、何不足なかった

陽中、車輪転ず

はらわたの中で車輪がころがるようにつらさ

羊腸の坂詰屈たり 車輪之が為めに摧く

羊腸坂は七曲り、車輪もくだけそう

雲、車為り 風、馬為り

雲を車とし、風を馬とする

故轍を守る

前からの生き方を守る

車一たび東西せば 別後今夕を思わん (以上、古詩源)

友と東西一別のあとも今夕をなつかしく思うことであろう

輪は出塞の車に随う

月輪がとりでを出る車を追う

紅顔、軒冕を棄て 白首、松雲に臥す

紅顔の少年のとき出世をすて、白頭の老年まで青松白雲に生きる

輪を摧いて道わず羊腸の苦

(以上、李白)

車輪がくだけでも羊腸坂を苦にせず

洛下、舟車入る

天下の中心洛陽に舟車が集まる

野馬の人を識らざるは 以て車蓋を駕し難し

野生の馴れていない馬は車をひかせにくい

太行の路能く車を摧くも 若し人の心に比すれば是れ坦途

太行山の路は車をくだくほどけわしいが、人の心に比べれば平坦

な道といえよう

禍福廻還して車、轂を転ず

禍福は車のこしきのようにまわる

半禄末だ及ばずして車先づ懸く (以上、白居易)

定年で給与が半分になる前に退官した

筆を投じて戎軒を事とす

文筆をすてて軍務にしたがう

城中の車馬まさに無数なるも

能く閑行を解するは幾人か有る (以上、唐詩選)

城中車馬は多いが郊外の閑行の趣きを解する者は少い

腸車転じて 一夕、九方を巡る (李賀)

はらわたの車が一晚に四方八方にかけめぐる

螳螂は轍に当って長臂を恃む

かまきりは長いひじをふるって車輪に立ちむかう

我は家す輦設の下

天子のいます都に住む

煎じて車声の羊腸を繞るを成さん

煎ずる湯の音は七曲りの坂をめぐる車の音のよう

稍喜ぶ過従の近づきたるを 筇に扶って車に駕せず

(以上、黄庭堅)

あなたの家が近くなり、車に乗らずに杖をついて歩いて行けるのがうれしい

四海、舟車を通ず

国中に交通網をめぐる

氷輪、轍あり、空を凌いで上る

(以上、陸游)

氷のような月輪が同じ道を今宵も上って行く

花時には車馬、洛陽に多からん

(元好問)

花どきの洛陽には車馬がこみあうことであろう

車行きて一輪摧け 鳥奮って一翼傷つく

(高啓)

車の一輪をこわし鳥の一翼を傷ける様に友を失った

五里にして瀑声を聞く 轟くこと車千両の若し

五里も離れて瀑布の音は車千両の通るよう

九十九の飛瀑 一門、萬軌を争う

九十九の流れが入りこむ瀑布の入口は多くの車が先を争うよう

雪浪は車輪の如し

散る水は雪のごとく、浪は車輪のようになまる

車塵を逐う

(以上、王漁洋)

車で遠ざかる友を見送る

此従り青山、鹿車を共にす

(清詩)

これから故郷へ妻と一しよに小さい車をひいて帰ろう

### 参考図書

- (1) 漢詩大系、全二四巻、集英社(一九六四)
- (2) 中国詩人選集、全十八巻、岩波書店(一九五七)
- (3) 名詩類選評釋、簡野道明著、明治書院(一九一五)
- (4) 中国古典選、全三十八巻、朝日新聞社(一九七八)
- (5) 史記、司馬遷、中国古典文学大系、巻一〇―一二、平凡社(一九八一)
- (6) 世界の歴史、巻一、貝塚茂樹編、中央文庫(一九七九)
- (7) 中国古代再発見、貝塚茂樹著、岩波新書
- (8) 騎馬民族とは何か、江上波夫編、毎日新聞社(一九七五)
- (9) 世界の歴史、巻三、七、十四、河出書房新社(一九八〇)
- (10) 天工開物、宋応星撰、藪内 清訳注、平凡社(一九七七)
- (11) 機械、吉田光邦著、法制大学出版社(一九七四)
- (12) 失われた動力文化、平田 寛著、岩波新書